

第一部

学校法人日本体育会の沿革

序 章 本稿の叙述と構成

学校法人日本体育会の歴史を語ることは同時に近代日本の体育史を繙くことに通ずるといわれている。西洋方式の身体訓練の基本形式に漸く慣れ始めた明治中葉に、国民体育の振興を錦の御旗にして登場した日本体育会は、その時代の趨勢に乗じて、国の信頼を獲得し、時には国に肩代わりして数多くの体育振興の事業を達成してきたからである。各地に体育（運動）場を設置して人々に運動の機会を提供したり、射撃場を開場して来るべき軍隊生活に備えさせたりもした。また、体操（体育）教員の養成も開始し、国民体育の振興に指導者の方面からも協力している。しかし、このようにして発展を約束された本会であるが、順風満帆の状態はいつまでも続くよしもなく、解散の危機に直面する。大正期における本会の活動が日本体育史に刻まれる機会が少なかったのは、この時期における本会の経営危機をそのまま映すものといえる。大正期に入って本邦のスポーツは本格化し、国際競技会を開催し得るまでに成長を遂げている。このスポーツの動向に遅れをとったのが本会であった。明治期には日本のスポーツを統括する団体としての期待がかけられ、オリンピック選手の選考母体たる組織になることが二度にわたって要請されていた。しかし、この期待と要請に答えることができず、結果として本会の斜陽化の時代を迎えることとなった。

日本のスポーツの時代に取り遅れた本会は、国民体育の振興を謳い続けることによって自らの存在意義を見出さねばならなかった。これによって、本会は再び歴史上にその名を刻むことになった。日華事変の勃発以来、日本は戦争状態に入り、平和の象徴としてのスポーツは国策の背後に追いやられてしまった。昭和十五年に開催予定の第

十二回オリンピック競技大会（東京大会）は返上され、時代は戦争一色に塗り潰されていく。その結果、国民の体位・体力の向上を錦の御旗にして国民体育の推進を図らんとしてきた日本体育会は再び息を吹き返すことになるのである。本会の経営する日本体育専門学校はその学科として海洋体育コースと航空体育コースを設置し、学生の競争従業の補助に努めているし、日本体育会の大陸への進出も企図された。戦争状態が継続している間は、本会の危機はなかつたといえよう。

しかし、敗戦と共に日本体育会は往時の勢いを失うこととなった。本会の設置する学校の諸施設は空襲によって灰塵に帰し、復興の目処が立たなかつた。ために、東京を離れ、茨城県土浦の元海軍航空隊跡に移転しなければならなくなつたのである。皮肉なことに、戦争が終わってから、「疎開」に追い込まれたといえよう。結果として、この疎開は一時的なものに終わっている。当初は永住を覚悟に移転を決意し、日本体育専門学校を日本体育大学へと昇格させることに成功したが、東京から離れた土地では入学志願者を獲得することが困難となつた。ために、再び東京への復帰が図られることになつたのである。かくして、本会の経営は安定し、昭和三十年代に入つてからは学校経営の規模を拡大していくこととなる。四十年代に入つて大学(1)、短期大学(1)、高等学校(4)、専門学校(1)、幼稚園(1)の学校が経営されるに及び、今日にいたつている。

いっぽう、戦後の体育・スポーツを巡る状況の変化は日本体育大学だけでなく、日本体育会の装いに変化をもたらしした。その契機はやはり、昭和三十九年十月に開催の第十八回オリンピック競技大会（東京オリンピック）であった。日本体育大学の学生はオープニング・セレモニーに出場したり、大会補助員として参加したこともあつて、オリンピック以後、学園はスポーツ一色に塗り潰されることになつた。以後、日本「体育」大学はスポーツのイメ

ージを膨らませながら、「体育」大学から「スポーツ」大学へと脱皮を図っていった。この大学を経営する日本体育会も、当然、スポーツに力を入れるようになり、運動施設、運動部の活動資金などで大きな理解を示すようになっていく。このことは本会のテコ入れによる運動部の強化策として横浜市緑区に健志台キャンパスが登場したことから知ることができる。このようにみると、日本体育会は日本体育大学とともに歩んできたために、日本体育会を語ることは同時に日本体育大学を語ることに通ずるといわねばならない。しかし、この一方で日本体育会は日本体育大学ではないことも忘れてはならない。日本体育会は百年の歴史のなかで幾度か改組を経験しつつ、新しい時代に対応してきた。その日本体育会の事業の一つとして生まれたのが体操教員養成機関である日本体育会体操練習所であり、日本体育会体操学校であった。それはとりもおさず日本体育大学の前身なのである。

それでは日本体育会はどのような改組を経験してきたのであろうか。明治二十四年八月十一日、本会の創立者日高藤吉郎は東京神田錦町に第一体育場を開場した。この体育場開場をもって本会が創立されたとされてきた。設立のための会合がいつ開かれ、いつ「設立総会」がもたれたのかは定かではないために、当該体育場の開場式典当日をもって便宜的に創立記念日とされてきたからである。とまれ、本会は「体育会」という名称でもって産声をあげ、翌年に「日本」が冠せられるにいたっている。ここに日本を代表する体育組織「日本体育会」が誕生したわけである。しかしこの時期には未だ創立者のプライベートな組織に止まっていた。明治三十四年九月、日本体育会は社団法人へと改組し、新しい段階に入った。しかし、会員の会費等を主たる財源にして運営する組織には限界があったことに加え、学校経営を行うには社団法人を財団法人へと改組しなければならなかったのである。昭和十五年四月、社団法人日本体育会は財団法人日本体育会へと改組された。さらに、戦後、私立学校法の定めるところにより、

学校を經營する財団法人は学校法人へとその組織をあらためることになった。この百年の歴史の中で、社会体育振興を主たる事業として誕生した日本体育会は学校經營を司る団体となったのである。

そこで、本稿では日本体育会という法人組織の發展段階に照準を定め、おのおのの組織の時代に本会がどのような活動を行ってきたのかを素描することにした。その柱は次のように整理されている。

一、日本体育会の創立とその社会的機能（第一章）

二、社団法人日本体育会への改組と会の消長（第二章）

三、財団法人日本体育会への改組と会の中興（第三章）

四、学校法人日本体育会への改組と發展（第四章）

日本体育会時代の事業は多岐にわたるが、学校經營事業としては、『日本体育会体操練習所』（明治二十六年三月）の開校と体操練習所の各種学校への昇格（『日本体育会体操学校』明治三十三年八月）が挙げられる。また、社団法人日本体育会時代には昇格された日本体育会体操学校の維持・經營をはじめ、荏原中学校の創設（明治三十七年四月）、大井幼稚園の創設（大正八年四月）、六郷幼稚園の創設（昭和六年五月）の事業が推進されている。さらに、財団法人日本体育会に改組してからは体操学校を専門学校に昇格させる事業に着手して、日本体育専門学校を誕生させながら、荏原中学校を維持・經營するとともに、譲渡・廃園にされていた大井・六郷幼稚園に代わってひなづる幼稚園を買収、幼稚園經營に乗り出した。又、戦後の財団法人時代に日本体育専門学校を新制大学へと昇格させ、日本体育大学の設置に漕ぎ付けていることは、財団法人日本体育会の最後の事業として見逃してはならない。この間、常陽中学校と常陽高等学校の設立と廃校を経験している。加えて、財団法人を改組して学校法人日本体育会

となつてからは学校経営事業の規模は拡大した。日本体育大学、日体荏原高等学校の維持・管理と併せて、日本体育大学女子短期大学の設置（昭和二十八年三月）、日体幼稚園の設置（昭和三十年六月）、日体桜華女子高等学校の設置（昭和三十三年三月）、柏日体高等学校の設置（昭和三十五年三月）、浜松日体高等学校の設置（昭和三十七年十一月）、日体柔整専門学校の設置（昭和四十八年三月）、などが数えられるのである。

このように眺め返してみると、学校法人日本体育会は学校経営事業を軸に発展してきたことがわかる。そこで、本稿では体育会—日本体育会—社団法人日本体育会—財団法人日本体育会—学校法人日本体育会へと発展してきた本の足跡を辿り、当該段階における本会の事業を学校経営事業の視点から点描することにしたわけである。

なお、昭和四十八年十二月に『学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史』が上梓されているが、ここでは本稿との異同について触れておきたい。また、その相違の基本的な点は標題（タイトル）にある。前者は日本体育会と日本体育大学を同時に表記した沿革史であるのに対して、後者は日本体育会のみ沿革史となっている。したがって、ここを上梓しようとする『学校法人日本体育会百年史』の中で取り上げられている八十年分の記述内容は『学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史』とほぼ同一であるとはいえ、その叙述の構成は自ずと異なっているといわねばならない。しかしながら、この百年史は八十年史を基礎として再構成したものであるから、百年史の中で描写された内容の不備な点は八十年史によって補われる必要がある。

だからといって百年史には八十年史以後の二〇年間の歴史の分しか新しさが無いというわけではない。八十年史が脱稿されてから以降に新たな資料が発見されたり、八十年史以上に資料をふんだんに使用して叙述した箇所も少なくない。確かに、第二章までは当該八十年史で提示された資料に基づいて叙述したところが多いけれども、第三

章からの叙述は八十年史で取り上げられた資料以外の材料も多く取り入れられている。また、八十年史では戦後(第二次)の叙述はそれまでの叙述と同じように学校法人日本体育会と日本体育大学とを区別して論じられていない。この点では百年史の方が学校法人日本体育会のみを対象としているだけに法人の歴史が浮き彫りにされているといえるわけである。以下、本会の組織的發展段階を(1)私設団体としての日本体育会、(2)社団法人日本体育会、(3)財団法人日本体育会、(4)学校法人日本体育会の四つに区分して本会百年の歩みを叙述することにしよう。